

ランボー：《僕の可愛い恋人たち》解説に向けて

三好美千代

序

1871年5月15日にランボーが、恩師ジョルジュ・イザンバールの友人で詩人のポール・デュムニエ宛に送った「見者の手紙」に添えられた《僕の可愛い恋人たち》が自らの過去の詩に対する悪罵であるのは、近年、多くの研究者が語るところである。しかし、同時にこの詩にランボーの恋愛体験や女性嫌悪の反映を見る考え方は相変わらず根強い。ところが、そうした見方は、この詩が「見者の手紙」に添えられなければならなかった必然性には結びついていない。人類を担い、進歩に拍車をかける「見者」になるという理想に取りつかれたランボーが、恋愛体験の失敗の腹いせといったごく私的なレベルの感情を、果たしてこの詩の中に持ち込みうるだろうか。さらに女性嫌悪を取ってみると、この時期のランボーが用いる言葉の暴力性は、女性に対するものに限られていない。《水から立ち現れるヴィーナス》がこの詩を論じるにあたって引き合いに出されるが、ランボーのヴィーナスの相貌の醜さも、形骸化した絵画、あるいは詩のテーマに対する苛立ちが偶像破壊という形を取ったと解釈出来るのであれば、《僕の可愛い恋人たち》における女性悪罵も一概に女性嫌悪と片づけてはしまえない。

さて、イザンバール宛て5月13日のもう一通の「見者の手紙」に添えられた《処刑にされた心臓》は、「フレスコ画＝旧態依然とした詩」を書く詩人たちの技法(chique=chic)に導かれてきた自らの詩に対する訣別の予告として

読めた。そして、ランボーがこの詩を構成するにあたり、プラトンの『国家論』をモチーフとして用いていると考えることで、この詩に関する幾つかの疑問が解決することも示唆した⁽¹⁾。こうしたランボーの方法や考え方は、二日後の手紙の中の詩にも取られているのではないかと考える。そうした理由から、ランボーが手紙の中で「最初の見者」とするボードレールの『悪の花』の表現の幾つかを、試みに、《僕の可愛い恋人たち》に用いられている表現の源泉と見なして、この詩の解釈を補うものとして考えていくと、論理性を拒んでいると思われた箇所、明確な論理が成立してくるのである。『悪の花』以外の源泉が類推される箇所もある。こうした、いわゆる原典探しと言われる方法が、恣意的に流れる危険性はある。しかし、ランボーの用語を19世紀における用法と照らし合わせ、かつ、こうした原典を、辞書の用例と同じ役割を果たすものと見なすことで、ランボー自身が一つの用語をいかに用いるかを類推することは可能である。そして、そうした方法を取ることで、《僕の可愛い恋人たち》が何故こうした難解さを伴った用語で語られねばならなかったか、そのこと自体のメッセージがなんであったかが、明らかにされてくると思われるのである。そういったことを念頭に置いた上で、まずは最初の部分から検討を始めよう。

浄化される空

Un hydrolat lacrymal lave	キャベツ色の空を
les cieux vert-chou :	蒸留水の涙が洗い流す。
Sous l'arbre tendronnier qui bave,	涎を垂らす若木の下で、
Vos caoutchoucs	お前たちのゴムは
<hr/>	
Blancs de lunes particulières	丸い涙を落とす
Aux pialats ronds,	奇妙な月で白い

Entrechoquez vos genouillères,

Mes laiderons!

膝当てをぶつけ合わせるがいい、

僕の醜い娘たちよ!

ここに掲げた二つの詩節にそれぞれ「涙」として、「hydrolat lacrymal」および「pialat」という表現が登場し、二つながらに「larme」あるいは「pleur」という「涙」を表す通常のフランス語が意図的に避けられている。

「見者」であろうとするランボーが頻繁に用いられる詩語を揶揄しているのであろうが、用語次第では、流れるような叙情を期待出来る部分に、そうした用語によって付加されたニュアンスは意味の解説をも脅かすようになってくる。

「涙の蒸留水 hydrolat lacrymal」は雨と考えられよう。ギリシャ神話で雨は神々の涙として語られる。さて、「蒸留水 hydrolat」は「アルコール alcool」に準じて作られた「薬を飲むための補薬としての水 hydrool」に接尾辞をつけた用語で、19世紀ラルースには「hydroolat」の項に「蒸留水 eau distillée」とのみ書かれており、植物の香りをつけた「芳香水」の意味はまだない。その他の派生語を見ると薬学の用語と理解してよいようである。自然という大きな蒸留器の中で太陽の熱の蒸留作用を受けた後に落ちてくる雨は、「涙の lacrymal」という形容詞によって、神々の涙にたとえられる雨の詩情を惹起させながらも、その詩情を事もなしとする。《処刑にされた心臓》で浄化力を期待されたのは海水だったが、ここでは雨である。この雨は、今までランボーが見ていた空＝世界の真実の姿を洗い出す。「キャベツ色の vert-chou」という形容詞は辞書にはない。「キャベツ chou」という言葉は「可愛い、素敵な」という意味の不変形容詞としても用いられるが、「非常に(キャベツのように)馬鹿である bête comme chou」、「くだらない新聞(キャベツの葉) feuille de chou」のように侮蔑的な意味で用いられる単語でもある。そして、このキャベツ色は《七才の詩人たち》の中で、日曜毎に読まされる聖書の小口の色として用いられている。故に、この空は「聖書の色に染まった空」と読めるのだが、それと同時に、アイロニカルに「青くさく馬鹿げた

(vert·chou)空」とも読める。また「cieux」は空と天国の二重の意味を持っており、後に続く偶像世界破壊の予告となっている。

ボードレールの《月の悲しみ》を受けて

さて、もうひとつの「涙 pialat」については、それがランボーの造語である故に注釈者たちの関心を集めている。「蒸留水 hydrolat」の「-at」という接尾辞を合わせて作られたのは明らかで、北フランスの方言として「pialer」が「泣きわめく piailler」と同様の意味で用いられた（スズメのことを俗語で「piaf」と言うが、語源はおそらく同じであろう）ことから名詞化されたこの言葉を「涙」とする訳だが⁽²⁾、「尿 pissat」あるいは「唾 crachat」といった、体外に吐き出された廃棄物に、接尾辞「-at」が用いられることを考えれば、涙を表すのに作りだされた「pialat」はランボーがその涙に対し叙情的共感を拒んでいることを示している。

「pialats」が「涙」として、具体的にどういう「涙」であろうか。近年、この「涙」を「雨靴についた水滴」とする解釈が出された⁽³⁾。その前の詩節にある「caoutchoucs」を「雨靴」としてのことである。しかし、この詩の最後の詩節は「Sous les lunes particulières/ aux pialats ronds,」と二連目の詩節に変更を加えたものとなっており、「雨靴についた水滴」説ではこの部分の解釈が苦しくなる。「涙」をその直前の「月」に掛かるものと考えた方がよさそうである。ここに、ボードレールが《月の悲しみ》で描きだす、詩人の手のひらに「密やかな涙の雫を落とす月」を重ね合わせると、充分に可能な解釈が出てくる。

「彼女（月）が、時としてこの地球の上に、無為にふさいで、一すじの密やかな涙の雫を落とすと、眠りを嫌う一人の敬虔な詩人が、オパールのかげらのように虹色に輝くその青白い涙の雫を手のひらの窪みに受け、太陽の眼からは遠

い彼の心の中にしまう。Quand parfois sur ce globe, en sa langueur
oisive, / Elle laisse filer une larme furtive, / Un poète pieux, ennemi
du sommeil, // Dans le creux de sa main prend cette larme pale, / Aux
reflets irisés comme un fragment d'opale, / Et la met dans son cœur
loin des yeux du soleil. 1

つまり、ランボーの月を、ボードレールの詩からの類推で、擬人化された月
と見なし、「丸い涙を流す奇妙な月」と解釈するのである。そうすれば、最後
の部分が、不自然さなしに解釈出来ることになる。「涙」は木の葉越しに落ち
ていくつも重なる丸い月光にも通じる。そしてその月はランボーにとっては受
け入れがたく「奇妙な particulières」月であるし、すべてを白い幻想で覆い
つくす月でもある。ランボーは、その月にうんざりしているかのように、月の
流す「涙 larme」を「pialat」という言葉に置き換え、しかも複数にして、丸
い涙を幾粒も流す喧しい月のイメージで「月の流す一粒の涙の雫」という詩情
を揶揄しているように見える。

バンヴィルのゴム＝脚韻

さて、その月が白く照らす「ゴム caoutchoucs」に戻れば、近年、ほとんどの注釈書で「ゴム長靴」だという解釈が取られている。また、ラテン語の絶対奪格構文が用いられたとして、後に続く部分とあわせて状況補語として「お前たちの雨靴は・・・で白く Vos caoutchoucs étant Blancs de・・・」というふうを読むという C. A. Hackett の説が紹介されている⁽⁴⁾。可能な説であり、母音衝突や耳障りな同音反復、暴力的な表現等の多用といった、作詩上の常識の無視がこの詩の特徴と考えれば、ラテン語とフランス語の文法の混同があってもおかしくない。確かに、フランス語の文法からすれば、読み切れないこの箇所の一つの論理的解決を与えることになる。そうした細かい分析がなされて

いる反面、しばらく後に書かれた《花について詩人に語られたこと》で、この言葉が用いられていることについて、近年発刊された三つの注釈書⁽⁵⁾の何処にも言及がなされていない。《花について詩人に語られたこと》では以下の部分で用いられている。バンヴィルが、脚韻は詩そのものであり、次々と浮かんでくる脚韻が詩人の才を明かすのだと、脚韻礼賛を行っていることを受けて、皮肉った部分である。

「商人! 植民者! 霊媒よ! お前の脚韻は、バラ色にあるいは白く、ナトリウム光線のように、流れ出るゴムのように湧き出てくるだろう。Commerçant! colon! médium! / Ta rime sourdra, rose ou blanche, / Comme un rayon de sodium, / Comme un caoutchouc qui s'épanche!」

ここでは「caoutchouc」は単数で、木から湧き出るゴム自体を溢れ出る脚韻に譬えている。「バラ色にあるいは白く・・・湧き出る」とあり、単純に解釈すれば、この詩の最初に登場し、痛罵される薔薇と百合の色であるが、「バラ色 rose」は甘い小説、感傷的少女趣味の小説を「roman rose」ということから詩についてもそうした含みを持たすことが出来ようし、また白は、皮肉にも無韻詩すなわち脚韻を踏まない、音韻のみの詩を「白い韻文詩 vers blanc」と言う。脚韻によって与えられるリズムそのものが詩であるという立場からすれば、無韻詩は詩ではなく散文である。そうしたことから、バンヴィルの詩が甘ったるく、自負する脚韻自体が、本当の詩を成立させない空虚なものと断罪していることになりそうである。また、シェークスピアが『アテネのタイモン』の中で、詩人に語らせている「我々の詩はゴム(gum)のようなものでひとりでに育ってしみ出るのです」という台詞は、一つの手掛かりとなろう。

そうした議論から、《僕の可愛い恋人たち》における「caoutchoucs」を「雨靴」あるいは「レインコート」とする論争を終わりにすることはできないだろうか。ゴムを木からしみ出る脚韻とすることが可能ではないだろうか。醜

い娘たちが詩の題材であるとするなら、そうした題材を表現する詩の「脚韻 rime」の比喩として、白い「caoutchoucs」が用いられたと考えてはいけないだろうか。この詩が添えられえている「見者の手紙」の中で、古典派の演劇詩人ラシーヌの名前をあげ、脚韻を「遊び」と断罪したランボーである。「なんという脚韻だ！ ああ！ なんという脚韻だ！」というこの詩の脇にある添え書きは自らの詩の脚韻にたいする自嘲というよりも、脚韻自体の存在意義に対する侮蔑から出た言葉であろう。

涎を垂らす木

さて、「l'arbre tendronnier」は「涎を垂ら baver」している。この言葉は様々な詩の中に登場し、《処刑にされた心臓》では「僕の哀れな心臓」が「詩を書く」ことを比喩的に語っていた。ここでも、この木を詩人の比喩として、木から何か「漏れ出る」こと、すなわち「詩を書く」ことを表していると考えられる。さて、この詩の中で「僕」が別に登場していることから、《処刑にされた心臓》において、ひたすらに「涎を垂ら baver」していた「僕の哀れな心臓」が「僕」にとって「他者 un autre」であったと同様、この木も「他者」としての詩人であると考えられる。ところで、『悪の花』の《祝福》という詩の中で、ボードレールが詩人を木に譬えている箇所がある。詩人を産んだ母親がそのような子供を産ませた神を呪って、次のように語る部分である。

「私を悩ませるあなたの恨みを、意地悪いあなたの呪われた道具の上に、お返ししようか。そして、この哀れな木をねじ曲げてやろう、/ 毒に冒された新芽が出ないように！ Je ferai rejaillir ta haine qui m'accable/ Sur l'instrument maudit de tes méchancetés,/ Et je tordrai si bien cet arbre misérable,/ Qu'il ne pourra pousser ses boutons empestés！」

木を人間の比喩として用いるのは特別なことではない。ただ、詩人の比喩として用いられるランボーの木はおそらくはこの一節に関わっている。「僕」にとっては「僕の哀れな心臓」同様、意思を欠く客体である。その源は《二ナの返答》に出てくる「緑の雫のような明るい色の新芽 (bourgeons)」同様、雫の形の「新芽＝若い娘 tendron」だろうか。だが、「caoutchoucs」が先程述べた、木から流れ出る「ゴム＝韻律」とすれば、その説と相いれない。「醜い娘たち」が木から生まれたものであるにしても、その源はゴムと考えた方がよいように思われる。

ユゴーの膝当て

さて、醜い娘たちがぶつかり合わせる「膝当て genouillères」は「caoutchoucs」との関連で、膝当て付きのゴム長靴があることから、ゴム長靴の「膝当て」とされている。ところが、この言葉は、パリコミューンの際、ブリュッセルに逃避したユゴーに絶望して書かれたとされる《正義の人》⁽⁶⁾の中で単独に用いられている。「ところで、お前の膝当てを売りに出すというのかい？ ああ、老人よ。聖なる巡礼者よ！ アルモールの吟遊詩人よ！ Alors, mettrais tu les genouillères en vente, / O Vieillard? Pèlerin sacré! Barde d'Armor!」この箇所は1871年4月14日の『Le Rappel』紙に掲載された《報復はやめよ》を念頭にしたものである。コミューンは、ベルサイユ軍の行う処刑一人に対し、三人の人質を処刑するという命令を出した。この詩の中でユゴーはその命令に反対の意を表明している。「正しくあれ Sois juste」とコミューンの人々に呼びかけ、「彼らが私たちの上に投げつけたものを私が彼らの上にそそいだりするなら/ 私は膝がすり減るほどに祈って許しを乞おう。A demander pardon j'userais mes genoux/ Si je versais sur eux ce qu'ils jetaient sur nous.」と語る。膝当てなしに膝をすり減らしてそんなことをやろうというのかいと、ランボーは老詩人を皮肉る。「僕の醜い

娘たち」の「膝当て」も、彼女たちの身体の老朽化、膝をぶつかり合わせるようなぎこちない動作でしか踊れない娘たちをからかってのものと考えられるだろうか。そして、「膝当て」がひざまづいて祈る時、膝を保護するためのものであるなら、醜い娘たちの敬虔さを揶揄したものであるとも考えられよう。《月の悲しみ》に出てくる詩人は、「敬虔な詩人 poète pieux」であったし、空＝天国は聖書のキャベツ色である。《報復はやめよ》は《僕の可愛い恋人たち》に先立つものである。「膝当て」という言葉はそれ単独で既にランボーの意識の中で一つの意味付けが行われていたと考えられ、「膝当て付きのゴム長靴」という結合は必要ではないように思われる。

僕の醜い娘たち

さて、ランボーは「僕の醜い娘たち」に対して次のように語る。

Nous nous aimions à cette époque,	あの頃僕たちは愛し合っていたね、
Bleu laideron!	青い醜い娘よ!
On mangeait des œufs à la coque	半熟卵をたべたっけ
Et du mouron!	それにハコベも!
<hr/>	
Un soir, tu me sacras poète,	ある夜、僕を詩人だと言ったっけ、
Blond laideron :	ブロンドの醜い娘よ。
Descends ici, que je te fouette	ここに降りておいで、
En mon giron ;	僕の膝の上で鞭打ってやるから。
<hr/>	
J'ai dégueulé ta bandoline,	お前の髪油を吐いてやったっけ、
Noir laideron ;	黒い醜い娘よ。
Tu couperais ma mandoline	お前はぼくのマンドリンの

Au fil du front.

額の糸を切るだろう。

Pouah! mes salives desséchées,

ふう！僕の乾いた唾が、

Roux laideron,

褐色の醜い娘よ、

Infectent encor les tranchées

まだにおうよ

De ton sein rond!

お前の丸い胸の溝の中で！

まず、青い娘と共に食べたものは半熟卵とハコベである。《花について詩人に語られたこと》で詩の中に二つの卵が登場する。まず、「古帽子（を被った詩人達の頭）の中の百合、アソカ、リラ、薔薇等の山ほどの花々」が「揚げ卵 *oeufs frits*」である。「笑いたまえ！卵を揚げてやろう。Ris-t-en! On te frit des oeufs.」という冗談があった。ボードレールは《笑いについて》の議論で、笑いは無知と弱さから来るものであり、「賢者」は笑いを恐れると語っている。《処刑にされた心臓》で詩人たちは一同に笑っていた。無知の笑いで出来た揚げ卵がそこにある。そして、詩人に対して「エッセンスの中で煮え立つ火の卵でいっばいの聖杯＝苧」を雑草の生い茂った野原に「見つけ出せ」と言っている部分にある卵は、人類に進歩をもたらす「プロメテウスの火」の卵である。そうしたことから推して、半熟卵は詩の題材のようである。

「半熟卵 *des oeufs à la coque*」の「à la coque」には俗語として「とびきりの、極上の」の意味があり、アイロニカルにはあろうが、当然そのことは意識して用いられたであろう。「ハコベ *mouron*」には青い花を咲かせるものもあるが、恐らくは脚韻のために選ばれた言葉でハコベ自体に意味はなく、「軟弱な、力のない *mou*」という形容詞があり、これは当然詩のスタイルにも用いられうる形容詞であることと、脚韻の要請が合致して選ばれたと思われる。

さて、青という色彩は初期のランボーの詩に頻繁に登場する。青い朝、青い草、青い血液等々、非常に特定しがたい色ではあるが、ランボーが《感覚》の中で「夏の青い夜に *Par les soirs bleus d'été*」自然の中を「女性というよ

うに幸せ」に行くのは示唆的である。自然と一体化した幸福感が「愛し合っていたね」に表されているように思われる。

次に、夜のブロンド娘は、愛の女神ヴィーナスを思わせる。愛は人を詩人にする。《ロマン》の中に出てくる金星、道で見かけた少女に恋をさせ、ソネットを書き送らせる「悪戯の星 *une mauvaise étoile*」は、笞の罰を受けねばならない。降りておいでと呼びかけるのも、そこからだろうか。また、一方でジュリエットのバルコンや、ロスタンのシラノが詩人だったことも連想させられる。その連想は次の「僕のマンドリン」へも繋がっていく。

黒い娘に対しては髪油を吐いてやる。これも詩を語ることと取れる。「*au fil du front*」は、「剣のひとなぎで *au fil de l'épée*」といった表現があることから、額＝思考のひとなぎで、詩人の奏でる音楽を、中絶させてしまうという解釈が取られている。ただ、Pierre Brunel が指摘するように、醜い娘たちをマリオネットと考えれば⁽⁷⁾、僕のマンドリンもマリオネットに見立てて「僕のマンドリンの額の糸を切ってしまうだろう。」と解釈出来ないだろうか。辞書には「(人の)足を切る *couper qn. au pied*」とあり、「額の糸 *fil du front*」を身体の一部のと見なせば、その解釈は可能となる。五人目の娘がいたことになる。黒は、ボードレールの言う「生命と芸術の黒い暗殺者 *noir assassin de la Vie et de l'Art*」(『亡霊 4. 肖像画』)である「時 *le Temps*」が連想される。ヴェルレーヌの『土星人の歌』にある《マンドリン》も念頭にはあったであろうか。豎琴ではなく恋物語を語る世俗的な楽器に置き換えられてパロディー化されてはいるものの、このマンドリンは芸術と、神の操り人形である人間＝生命の二つを象徴しているとは考えられないだろうか。「時」は未来の約束としてのみありはしない。

褐色の娘に対しては「僕の乾いた唾がお前の丸い胸の溝の中にまだおっている」と語られる。大地の女神の色「焦げ茶色 *brun*」は髪の毛の色を表す言葉「褐色 *roux*」に置き換えられる。大地は世界をその乳房で養う。ボードレールは大地の女神の褐色の乳房を歌い上げた。ランボーも《我一人なるものを

信ず」で大地の女神の「広大な胸 immense sein」を讃えたはずである。しかし、そこに掘られた「溝tranchées」の中ではランボーの唾＝詩は乾いてなお悪臭を放っている。「溝」という言葉には戦時の「塹壕」の意味がある。人間の手によって戦場となり果てた大地は醜い。

色彩と絵画

青は自然と関わり、ブロンズはヴィーナス、黒は時、褐色は大地であり、醜い娘たちのそれぞれがランボーの書いた詩のテーマの象徴であるとするなら、彼女たちは現実の女性とは何の関わりもない。《月の悲しみ》に出てくる「虹色に輝く(Aux reflets irisés)涙の雫」がはじけたところで彼女たちは色をもつのかもしない。そして、その色彩が絵画すなわち詩を描かせる。

後半の詩節に「落伍者の星たちの生気のない山よ、隅を埋めよ！ 神にすがつて死んでしまえおぞましい心配りを背負って！」とあり、「落伍者の星たちの精気のない山」*Fade amas d'étoiles ratées*」が「失敗したキャンバス画の精気のない山」*Fade amas des toiles ratées*」との言葉遊びであり、キャンバス画が詩の比喩として用いられていることは確かであろう⁽⁴⁾。『処刑にされた心臓』のフレスコ画が「彼ら」の詩なら、ランボーの詩はキャンバス画であった。そうしたキャンバス画＝詩に対して、詩法上の心配りを意味するのであるうか、「おぞましい心配りを背負ったまま神の手の内にくたばってしまえ」とランボーは言う。ボードレールは《亡霊 Ⅰ. 暗闇》で「私は愚弄する神によって、哀れ、暗闇の上に描く事を強いられた画家の如くだ。」と語っている。神によって描かされたキャンバス画を捨て去ったところに、ランボーの「地獄墮ち」の意識の原型が求められる。さて、ボードレールは詩のなかで、絵を描くための色彩を語りしなかった。ランボーは詩が絵画なら色があると考え。イザンバールの家に滞在しているとき読んだモンテーニュの一節をここに想起出来るだろう。プラトンが語ったとして、モンテーニュが引用している箇所を

ある。「・・・彼(詩人)からは、違った色の、反対の実質を持った様々なものが、とぎれとぎれのながれとなつて漏れて出る」。そして、醜い娘たちの色は色付けされる《母音》への前奏曲としての側面、一種の象徴性をはっきりとこの詩のなかで見せているのである。

終わりに

《僕の可愛い恋人たち》は、それまでの詩の表現が写真のポジであるとするなら、そのネガを作ってみせたと言えるだろう。既存の詩、あるいは自らの詩の表現のもつ芸術性と言えるものを、例えば、ボードレールを「見者」であると言わしめた理由であるはずの『悪の花』のみごとな比喩、表現を、次々と矮小なものにして舞台裏からみせるのである。我々に取ってボードレールやユゴーの詩は心地よい。しかし、ランボーがこの詩の中で見せるネガとも言うべき視点は——ネガであるからこそ難解でもあるし、筆者が語ったことのいくつかには疑問と躊躇がないわけではないのだが——一旦それを垣間見たとき、その視点、そしてポジを反転させる用語のあり方に対して一種の驚きを禁じえない。そこに、『悪の花』のボードレールすらも「あまりにも芸術的すぎる環境で生きた」として乗り越えようとする、ランボーの言語改革の一つのマニフェストがあったように思われる。

注：(1) 拙稿『ランボーとプラトニズム』詩論 第15号、1994、p. 26.

(2) 《Rimbaud Poésies》Préface, notices et notes par Jean-Luc Steinmetz: G-F Flammarion, 1989, p. 251.

(3) 注(2) 参照。

(4) 注(2) 参照。

(5) 注(2)/《ARTHUR RIMBAUD, OEUVRES COMPLETES, CORRESPONDANCE》Edition présentée et établie par Louis FORESTIER: Robert Laffont 1992 /《Arthur Rimbaud, OEUVRE-VIE》Edition du centenaire établie par Alain Borer avec la collaboration d'André Montégre: Arléa 1991.

(6) Yves Reboul 《À propos de l'homme juste》Parade sauvage, no. 2, avril, 1985

(7) Pierre Brunel, 《Arthur Rimbaud ou l'éclatant désastre》Champ Vallon, 1983, p. 53.

(8) 拙稿『星とランボー』年報・フランス研究 第27号 1993.